

第27号

アクトス

文芸集団 ACTOS
平成二十七年八月

アラトスの夢の世界にたゆといし書籍の海の吾ひとしづく

石川希理

※アラトス(Aratos)は、紀元前三世紀に活躍した古代ギリシアの詩人。古代マケドニアで活躍。ギリシア神話の記述者。

はじめに

文学は文楽である。

日記は、それが結果として自己以外の人の心に響くメッセージか否かによつて、文学と峻別される。

言葉は命である。その言葉を、文学は文字という記号を媒体として表出する。記号である故に、その構成と判別に知性と経験が必要とする。とともに、組み合わせられた記号は、その記号以上の意味と感情を含み、一定の時間と空間に影響を及ぼすものとなる。

それを踏まえつつ、事実の伝達のみでなく人の思考・情感を伝えるもの、それが文学の誕生である。

したがつて、文学は、いかなる形であれ、驚き・感動・好奇心・悲哀という「心を動かす」「心に響く」ものでなければならぬ。「文学は文楽である」という意味の「楽しさ」はそういうことである。

また文学は文芸であり芸である。良いものを取り入れて「消化して昇華」し、作家として常に技能・内容を高めねばならない。

本誌は文芸活動を通じて文化芸術の振興と、それが個々の人生の糧となるように努めるアクトス集団の機関誌である。ために相互の研鑽・理解を深め、よりよい創作活動と、豊かな生涯を形成する内容を目指す。

本誌の構成は、短詞型（詩・短歌・俳句・川柳など）、散文（小説・随筆・児童文学・紀行・評論など）のすべての文芸ジャンルを含む。

多くの方の参加と、関係各位の協力、援助を望む。参加同人の、苦しいが楽しい、コツコツと積み上げる個人的努力と、互いに刺激し成長し続ける「和」の、アクトス活動でありたい。

平成二十一年一月一日

アクトス代表・編集長 大西 亥



目次

読書は他人にモノを考えてもらうことである 石川希理 1

趣味・マンウオチング 明花 5

走る 小野村 新 8

阿倍野友之・石川希理対談 文明論 死について 14

いち対いち対いち 高阪 博一 30

北海道の高校生との不思議な縁 魅華 38

ハハハの歯 一八十歳で二十本の歯 40

編集室から 55

**読書は他人にモノを
考えてもらうことである**

これはドイツの哲学者ショーペンハウアー（ショーペンハウエル）の言葉です。

「ぎよつとしました。こども時代から「しっかり本を読みなさい」と家庭でも、学校でも教えられてきたからです。

多読・乱読・速読とまあ言葉は色々ありますが、本を読むのは知識も増え、考え方も学び、自分の生き方に大変役立つものであると思っていたからです。

もちろんこの文章を読まれている方は既に気づ

かれているとおり、「本を読むことが悪いことだと」ショーペンハウアーはいつているのではないのです。彼の言葉を続けます。

「ほとんどまる一日を多読に費やす勤勉な人間はしだいに自分でモノを考える力を失って行く」

「読書するとは、自分でものを考えずに、代わりに他人に考えてもらうことだ。他人の心の運びをなぞっているだけだ。それは生徒が習字のときに、先生が鉛筆で書いてくれたお手本を、あとからペンでなぞるようなものだ。したがって読書していると、ものを考える活動は大部分、棚上げされる。自分の頭で考える営みをはなれて、読書にうつると、ほっとするのはそのためだ。だが読書しているとき、**私たちの頭は他人の思想が駆けめぐる運動場にすぎない**。読書をやめて、他人の思想が私たちの頭から引き揚げていったら、いつたい何が残るだろう。だから

ほとんど一日じゆう、おそろしくたくさん本を読んでいると、何も考えずに暇つぶしができて骨休めにはなるが、自分の頭で考える能力がしだいに失われてゆく。いつも馬に乗っていると、しまいに自分の足で歩けなくなってしまうのと同じだ。

(シヨールペンハウアー『読書について』光文社古典新訳文庫 P. 138-139)

ということですよ。

シヨールペンハウアーは実存主義哲学の先駆者で、ニーチェへの影響が大きいそうです。それ以外にワグナー、シュレーディンガー、アインシュタイン、フロイト、ユング、トルストイ、トーマスマン、など様々な学者や文筆家に影響を与えて、その考えは現代思想においても受け継がれているといえます。

私の読書は乱読に多読、しかも偏りがありません。といつても随分多くのことを本から学んできま

した。また、小説類は娯楽であると同時に、そこから文章を書くコツといったモノを捉えてきた気がします。その意味で、他人の思想が駆け巡るだけではないのですが、確かに考えるということは十分にできてこなかった気がします。

デカルトは『方法序説』で、「直観―分割―総合―枚挙」を学問の方法としました。「枚挙」というのがわかりにくいですが、「再点検」とすればいいでしょうか。

先ずは「直観」というわけですが、全くの疑義がないことから論を進めよというのです。明証的な事実の上でというわけです。

些か私見が入りますが、明証的な事実というのは沢山の知識、自分の経験に基づいてでてくるものだと思います。釈尊が「正見」といわれたものの方、実存的経験的な「我」がするものであると考えています。つまり「直観」の前に学習や思考が必要です。「直感」という漢字がありますが、その感

覚的な「直感」でさえ、生まれたときからの積み重ねが産みだしたモノと思うからです。

この意味で、しっかりと読書して、自分の経験を積み、それと照らし合わせ、他人の意見を聞き、考え抜いていくと「直観」になると思います。

この「直観―分割―総合―枚挙」を「直観―分割―総合―点検」とし、さらに「直観」の前に「学習」を入れてはどうでしょうか。哲学者には当然のことでも凡人にはわかりにくいからです。

即ち「学習―直観―分割―総合―点検」です。この総ての部分において「考えること」が必要でしょうか。さらにこの五つの項目は、らせん状に繰り返されます。

私は、文章を書くことはこの「学習―直観―分割―総合―点検」が総て含まれていて、「学習」の段階における「読書」は、書くことで昇華されるのではないかと考えています。

論文は昇華を論理的に目指したモノですが、私

たちの書く「エッセイ」「詩」「小説」「俳句」「短歌」といったものは、「創造」という行為の中に、「学習―直観―分割―総合―点検」を含んでいるのです。

「多読を誇る人間は、『いつでもただちに本に向かうという生活を続け』て『精神から弾力性をことごとく奪い去られて』自分でモノを考えるをやめてしまった人間、不必要なことでいつも頭がパンパンな単なる『馬鹿』である。多くの音楽を聴いても耳が良くなるわけではないように、多読をしても頭がよいわけではない、よくなるわけではない。多読だけでなく人間は知識だけの『馬鹿』になつてしまうのだ」

というのは痛い警告です。その意味で、読書や経験を自分の書くものの中に膨らませ、新しいものを作り上げていく『文藝活動』『文筆活動』は、ミュージシャンが作詩作曲をするようなものです。

趣味として「推理小説」や「恋愛小説」「経済小説」などをゆつたりとして読むこともいいと思います。それもまた広義には、文章力や考え方の勉強に、色々な世界や世界観を知ることにつながります。ただ、シヨーパーンハウアーのいうような読書に陥らないようにするには、創作がよい方法であると思います。「読書は他人にモノを考えてもらうことである」という点には気をつけたいと改めて思いました。

石川希理「2015／2／28」



趣味・マンウオチング

明花

週一、電車に乗る。決まった曜日、決まった時間帯。

私の日常はほぼ車生活。週四、車通勤をしている。車は目的地に到着するまで個室のような感覚なので、降りてから電車に乗るまでの移動は、大げさだが社会と接しているような感覚になる。

例えば、駅構内のこ洒落たショップで、「こんなのが流行っているのか」とチェックしたり、本屋での立ち読み、駅のポスターやチラシから「今」を感じる時間は、妙に新鮮だ。

歩いている時にしか気がつかないことはたくさんあつて、刺激を受ける。

そして、つい興味を持つてしまうのは行き交う人々や車内の人たちだ。その日は、見た目はジャパニーズビジネスマン二人連れだった。

歳の頃は四十代後半か。つい頭の薄くなり具合で男性の年齢を判断してしまうが、肌の色艶からすると四十代前半かもしれない。どう見ても日本人の顔立ちなのだが、いきなり英語で会話を始めた。

「えっ？」

その違和感で私の興味のボタンが押されてしまった。よく見れば、お二人共中年男

性には違いないが、若々しく、セクシーな印象を持った。今まさに、働き盛りで脂が乗っている感じ。

一方は、英語がなめらかで、話すたびジェスチャーがついている。ネクタイがやや派手目、カバンなどの手荷物は一切持たずスマホのみ。髪型はおしゃれなカットで、ぴちちとしたスーツを着こなし、革靴の手入れも行き届いている。顔はどう見ても日本人なのだが、中国の方？ いや韓国の方？ 東洋系には違いないのだが、やはり遺伝的には日本で、国籍はアメリカかな？

もう一方は、こちらも粹な感じのカットに、紺のストライプのぴしつとしたスーツ。ネクタイだけが抑えた印象。大きな違いは、英

語は流暢なものジエスチャーがなく、どさつとした大振りのカバンをお持ちだった。

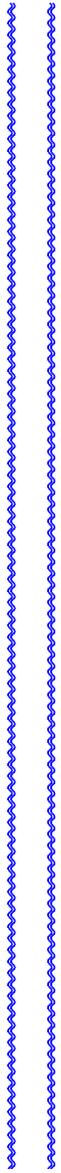
この方は技術屋さんで、海外からのお客様をご案内しているのだろうか？ それとも日本語禁止の企業の同僚なのだろうか？ 自分の持つ引き出しのなから思い当たるシチュエーションを取り出して想像を膨らませます。

ノージエスチャーイングリッシュの男性が、ネクタイ派手目の男性の手に出来た傷を「モスキート」に刺されたのか？ と、フランスに話しかけて楽しそうだ。でもその傷は、どう見ても擦り傷で（蚊に刺されたものではないでしょう）と、私は心の中で突っ込んだ。私の心の声はもちろん日本語で。

にしても、日本人男性同士では、こんなに会話を楽しんでいる空気感は出ないだろうなあ。

「明石、明石、次の停車駅は朝霧です」とアナウンス。お二人は揃って下車された。

JR西明石駅から明石駅の四分間。あの二人は何者だったのか？ 答えにはたどり着けないけれど、楽しい四分間だった。やっぱりたまには電車に乗らなくちゃ。



走る

小野村 新

蛇に出遭うのは、きまつて蛇のことが頭の中にない時である。走っている時にはいつも、頭の中は蛇への恐怖感で満たされているというのに――。

走ることはさまざまな思考を与えてくれる。そのような思考の背後を、絶えず蛇と出遭うかも知れないという恐れのが、漠然と覆っている。しかし、時として「蛇」が完全に脳裏から取り除かれるような思考に巡り会うこともある。それは、楽しい将来の夢想であつたり、生活上のささいな悩みであつたりするのだが、蛇に出遭うのは必ずと

いつていいほど、そのような一瞬なのである。「蛇がいるかもしれない」という持続的な恐れが蛇の出現を防いでおり、蛇への意識が取り除かれると、その隙をねらうようにして蛇が現れる。妙なものである。

今日の蛇もそのような意識の隙について出現した。その蛇は、細い山道をふさぐ格好でべつたりと横たわっていた。二、三メートル手前で蛇に気づき、急停止した。おそるおそる近づき、蛇を観察してみる。大きな蛇である。一メートル三十センチもあろうか。ぬめつた緑褐色の体がグロテスクに光っている。頭部が大小の鱗で密におおわれ、その辺りに特に無気味さをおおし出しているその蛇は、重量感ある体を九月の朝の太陽

に晒していた。

眠っているであろうか、……。蛇は動かない。小石を投げつけてみるが、動く気配はない。死んでいるのかもしれない、しかし、この蛇の体のぬめり具合は、死体のそれではないようにも見えた。

前へ進もうとすれば、道をふさいでいる蛇を飛び越えなければならぬ。飛び越える拍子に、蛇が急激な動きをとるかもしれない。その動きを想像すると、言いようのない嫌悪感が体を満たす。しかし、引き返すことはできない。誰も見ていないとはいえ、男の沽券にかかわるような気がしたからである。「エイ！」という気合いもろとも蛇を飛び越えた。その後、振り返ってもう一度蛇をじ

つくりと観察した。蛇はピクリとも動かない。やはり、この蛇は死んでいたのだ。

分速百二十メートル、「走る」という言葉にかろうじて正当な意味を付与することができるぎりぎりの速度である。何というのろい走りだ。腹のでた初老の男が、平日の昼日中に山の中をひとりで走っている。その男が一匹の蛇と出遭って心の中に恐慌状態をきたす。そりゃあ、蛇蝎のごとく、だ。蛇など好きな人間がいるわけはなからうが、自分の蛇嫌いはちよつと極端に過ぎるのではないか。

自宅の裏山は、ジョギングロードとして最適の地である。KDDの私有地だったものを最近市が買い取った。台地状のなだらかな

山である。無線電信の施設と施設をつなぐ道路が縦横にはりめぐらされており、山道ではあるが、小型車両が通行できるだけの道幅もある。その中心道路をまつすぐに走り、進む。

松林の中の山道を過ぎると視界が開け、この辺りで最も大きな池に突き当たる。奥池という、緑色の水をたたえた深い池だ。そのほとりに、禅宗の寺がある。鎌倉時代に建立された古刹だ。静かに流れてくる風を身に受けながら、いつものように境内のベンチで休んでいると、本堂から住職がやおら出て来た。ほっそりとした背の高い人で、背筋がぴんと伸びている。藍色の作務衣を上品に着こなしていた。ほほえみながら、「お茶で

もどうですか。」と右手を口に近づけ、飲む動作をした。昼前のことでもありとまどつたが、勧められるままに庫裏の座敷に上がった。

座卓を囲んでとりとめのない話をしていると、夫人がお茶を運んできた。

「これは一昨日、奈良の飛鳥で買ってきた柿モナカですよ。お口に合うかどうかわかりませんが……」

伏し目がちに応対する、その端正な顔立ちに見覚えがあつた。しかし、誰か思い出せない。

「お近くからですか？」

自分と住職の双方に問いかけるようなまなざしで訊いてきた。

「天神さんのとなりに新興住宅地があるでしよ。そこから走つてきました。」

夫人は黒目がちの眼を大きく見開いて、感心したという表情で自分を見た。

「あんなに遠いところから、よくまあ……。お彼岸を過ぎたからといっても、まだまだ暑いでしょう。私など、近くに住んでおきながら、KDDの松林の道を一度も歩いたことがないんですよ。奥池を越えたことすらないので。中心の舗装道路から枝道が何本も伸びていて、散歩には適しているそうですね。私の友人がひとりでウォーキングして道に迷い、往生したと言っていましたよ。ところで、……。」

「もういいから！」

喋り続けようとする夫人を住職が制した。その態度には強い威圧感があった。

「ゆつくりしていつてくださいね」

夫人は初めてほほえみの表情を見せ、その場を離れた。

その後、住職は健康に関する話ばかりした。その中で、印象に残った話がひとつあった。人差し指と中指を交互に使って、鼻梁をとんとんとリズムカルにたたいてやる。一分程度でよいから、これを朝の日課にする。一日中頭脳が明晰に保たれ、健康にもよいのだ。この行為のことを、住職は「鼻を炒る」と表現した。

こうですか？ まねて、やってみた。いつもどちらかの鼻腔が詰まっている不快感を抱

えている身なので、聞く価値のある話だと思われた。住職は来年、米寿を迎えるらしい。実際の年齢よりも十歳は若く見えるその容貌に驚かされた。帰る時には、夫人も出て来て二人で見送ってくれた。

蛇のことが気になっていた。遠回りになるが別の道を帰ろうか。しかし、こわいもの見たさのような気持ちがり、同じ道を引き返した。走りはじめて数分経過した頃に、突然住職夫人が誰であるかが判明した。彼女は、小学校の時の担任の先生だったのだ。確か、三村真弓という名前で、五年と六年を受け持つてもらったはずだ。あの頃は、まだ二十代であつたろう。若々しくて、はつらつとした女性教師だった。ところが、自分が

六年生の夏休み、彼女は大きな不幸を背負ってしまったのだ。同じく教員で中学校に勤めていた夫が、病気で亡くなってしまったのである。キリスト教の教会でとり行われた告別式に、クラスメイトと一緒に参列した。祭壇を飾る純白の花々、演奏されるオルガンの音、賛美歌の斉唱、牧師の説教……。過去の一場面がしだいに鮮やかな映像となつて、脳裏に浮かび上がる。――

夫を亡くしてからの彼女の生活は、ずいぶんすすんだものとなつた。授業に関して、生徒に自習をさせて、自分は窓の外を眺めていることが多かつた。放心しているように見える時もあったし、遠くを射るようなきつい視線で凝視している時もあった。そ

のうちタバコを吸い始めるようになり、近寄るとたばこの匂いが鼻をついた。授業に遅れてくることもたびたびで、職員室まで呼びに行くこと、出入りの業者と話し込んでいた。「お客さんだから、自習していて」。いつも、そういう答えが返ってくるのだった。あの頃からすでに五十年が経過している。彼女も、傘寿に近いはずである。

きていたのだ。

蛇の居た場所が近づいてきたので、走り歩行に替えて注意をはらった。しかし、居るはずの場所に蛇は居なかった。道をふさいでいた蛇の生々しい体が脳裏に蘇った。そして、その長い体が蛇行しながら草むらに消えていく姿態が想像された。全く、蛇は生



「阿倍野友之・石川希理対談」

本日のテーマは、文明論の2回目、「死について」です。

4月4日居酒屋にて

石川 今回は早くお会いしたかったです。

阿倍野 まえは大変なところで終わりましたからね。

石川 新しい段階に人類が進むには、日本という国のあり方や思想、文明、そしてお釈迦様の思想が役立ち、ということでした。

阿倍野 ええ、梅原猛先生などは、「山川草木悉皆成仏」という総ての存在が仏であるという考えが、今後の世界に役立つといわれていますね。『人類哲学序説』（岩波文庫2013／4／19）を書かれています。これは天台宗の「本覚思想」というありのままの現実そのものを受け入れる思想です。存在そのものが仏である。そして仏とは「無常・非我・縁起・輪廻」という真理に目覚めた人ですから、人は死ぬものであり、自分は死んで子どもを生かしていくというありのままを受け入れる、それが新しい人類を導く指針だと思います。脱線しますが、梅原猛先生は1925年生まれです。

石川 今年は2015年ですから九十歳！

阿倍野 ええ、それでこれから「本論」を書かれるようですね。

石川 まあ、なんというか。凄い、としか……。

阿倍野 でしょう。ガンにも三度ですか、罹られている。われわれはその生き方を少しでも見習う必要がありませんね。まあ梅原先生の万分の一くらい知識しか有りませんが……。

石川 そうですね。私など智慧も足りない。

阿倍野 ここは『智慧も足りないなどと謙遜を』とはいいません。(笑)いいんですよ。しっかり考えて、勉強し続けて、生きていくのが「善き生き方」ですからね。

石川 ありがとうございます。慰めていただいて。

阿倍野 いえいえ、私自身にも当てはまります。同病ですね。(笑)

石川 同病相憐れむ……。いえ、そんな……。

阿倍野 同じなんですよ。人はみんな、大同小異。そこから一生懸命に生きる。

石川 そうですね。

阿倍野 で、元に戻って、人類の新しい思想が「山川草木悉皆成仏」ですが、これは総てを受け入れるということになります。そこで日本の歴史的あり方がいいんですねえ。

石川 いいんですか。

阿倍野 現在の研究では日本の大昔、数千年前。縄文と弥生というのは、縄文があつてそれが減んで弥生になったのではなさそうなんです。並立しつつ次第に弥生になっていく。これは凄いですよ。徹底的に何かを減ぼすのではなく受け入れつつ発展していく。神道があるところに、仏教という新しい神がやって来る。

石川 新しい神ですか。仏でなくて。

阿倍野 ええ、蕃神です。野蛮人の神。だから古代では仏ではなく、神道と同じ神として仏教は受け入れられていくんです。538年と552年という、公伝された年代には異説がありますが、これ以前に私的に伝わっていたらと思うられます。おもしろいですね。初めから同化しつつ受け入れていくのです。もちろん争いが絶無ではないですが、キリスト教がローマ帝国で初めは厳しく排斥された例などと比べると違う。後にキリスト教はそれまでの多神教を制圧してしましますからね。ただ、まあ伝わったのが仏教、就中大乗仏教であつたからでもあります。

石川 それはどういうことですか。

阿倍野 仏教というのは元々、宗教か哲学かという論争がありましたね。「無常・非我・縁起・輪廻」を世界の真理と見るのですから、「神が総てを作つた」という宗教ではない。宗教の定義は確定したものはないので、超越的絶対的唯神一神、あるいは超越的存在者がある。でも「無常・非我・縁起・輪廻」を知つたものが仏で、そこから解脱するのが仏教です。それがこの世界の真理なら、創造主を設定するキリスト教やイスラム教、あるいは神を崇拜するヒンドゥー教などと違い、宗教には当てはまらないわけです。

石川 日本の神道の神とも違う。

阿倍野 ええ仏教の本質的な部分は、神とか超越者がいないのです。

石川 それなのに蕃神ですか。

阿倍野 はい。お釈迦様の教えは「無常・非我・縁起・輪廻」です。これなら神という位置づけは出てこない。ところが紀元前後くらいに大乘仏教が生まれてくる。いま日本で見られるような、たくさんの仏さまが生まれてきて、それが中国から朝鮮、そして日本に伝わってきたのです。残念ながらお釈迦様の直接の教えと

言われる原始仏教は入ってきていない。入ってきた部分も「自分だけが真理を悟って解脱する低い教え」ということで顧みられていません。

石川 お釈迦様の教えと大乘は別物なのですか。驚きました。

阿倍野 私も最初は、「自灯明・法灯明・死後は不知」といつて自らを頼りに、真理を頼りに生きなさい、死後どうなるというようなことはわからないというお釈迦様の教えと、沢山のあの世の仏さまがでてくる大乘仏教はまったく異質だと思っていました。

石川 そうじゃないのですか。

阿倍野 お釈迦様は経験的事実を述べられていて、あの世のことはわからないので教えられていません。ですのであの世のことを信仰する宗教は否定されていません。私には分からないからいろいろと信仰はあってもいい、ただし、その信仰が人の道に外れるものならばダメだといわれるのです。

石川 それは具体的に言うと。

阿倍野 例えば、日蓮宗も真言宗も、浄土教も、禅宗も総て信仰することは認めますが、お金の多寡によつて戒名が違つたり、唱えるお経を変えたりは否定されるでしょうね。人の道に外れますから。

石川 日本の僧侶にとつては厳しいですね。

阿倍野 ええ、それもいま変わりつつあるようです。日本型仏教が減びつつある。

石川 減ぶのですか。

阿倍野 正確にいうと、減んで再生しつつある。そのことはまた機会があれば話しましょう。

石川 それでは、元に戻つてその大乘仏教の哀れみの多い仏さまは神様ではないのですか。

阿倍野 例えば阿弥陀仏は自分の国土を持つ仏さまですが、キリストのように宇宙も光りも時間も動物も人間も作った世界の創造主、これを超越的絶対的唯神といいますが、そのような存在ではない。しかし限定された力の超越的存在者なんです。つまり神様と同じ。

石川 日本古来の神様を完全に否定しないどころか仏さまも同じなのだと思いますね。

阿倍野 そうです。だから蕃神として受け入れられていく。少し難しいですが、いわば哲学である仏教を基本に持つ神的存在としての仏さまなので、実に折り合いがよかつた。これがキリスト教なら争いが起きたでしょう。その意味では歴史的偶然が幸いしたといえる。

石川 神様が一人増えただけですか。

阿倍野 そうですね。もともと『漢書地理志』『後漢書東夷伝』などで「楽浪海中に倭国あり」といわれた極東の国が我が国です。そこから東には海しかない国です。だから押し寄せた文化はそこに混然と溶け合っていく。例えば、かな文字などは漢字を利用して作り上げたわけでしょう。大和言葉は訓読みとして与えた。漢文は返り点をつけてそのまま読めるようにした。朝鮮半島では巨大な中国の圧力に反発して、漢字を利用せずにハングル文字を作り上げた。我が国は漢字を上手く利用して遙かに複雑で、自国の文化を失わない文字を作り上げた。前回にチョンマゲ頭のユニーク文化が我が国というお話しをしましたが、なるほどハンチントンのいうように日本文明は世界の中でも珍しい孤立文明なのです。

石川 それが「死」とどうつながりますか。

阿倍野 忙しいですね。(笑)

石川 すみません。私も六十七歳で、日本の男性の平均寿命まであと十三年。どうも先が見えています、

「死んだらどうなるのか」と時折考えるのです。まあPPK、いわゆるピンピンコロリとか、認知症、寝たきり、尊厳死、安楽死といったことも気になりますが、それも「死とはなにか」という答えがあると考えやすいと思うのです。

阿倍野 それは私も同じです。なにせ高齢者ですからね。

石川 いまは、「死んだらそれで終わりかな」と考えます。でも「それでは淋しい」「命は続く気がする」とも思います。

阿倍野 なにせ死んだことのある人はいないわけです。科学的にも判らない。

石川 科学的にいうと死後はないのでしょうか。

阿倍野 「ない」のではなく判らないのです。ここがポイントの一つです。私たちは科学文明の発達で、相当色々と解明できて、その科学力の何処にも引つかかかってこない「死後」などないのだ、非科学的だと思つていきます。一方、死後はあるという主張の根拠は個別的でオカルト的ですから、ますます科学的に「死」はないということに納得しようとする。

石川 そうですね。判らないのですね。

阿倍野 逆に現在の科学力で判つていることを考えると良いのです。たとえば人類の最大の特徴は発達した脳ですが、この仕組みはいろいろ報道されたり本に書かれたりするけれど、実際はまだほとんどなににも判つていない。脳のこの辺りがどうやら感情を司りという程度です。情報をどう記録しているかも判らない。伝達する仕組みも微量電流と思つていたら、脳神経の末端のシナプスでは、その間隙を化学物質が行き来している。電子計算機が将棋やチェスで人間に勝つと、人間の脳など大したことはない、すぐに人間より優

れたコンピュータが現れると思う。科学万能ですわね。

石川 しかし、ロボットが人に代わる世界など、よく映画にもなっています。

阿倍野 部分部分の機能では、人間より遙かに優れていても、全体として人間を追い越すロボットやコンピュータは、人間が減びないで続いたら或いはできるかも知れませんわね。しかし私は、それより先に今のままでは一、二世紀の内に人類そのものが減びるのではないかと考えています。

石川 人類の存在はそんなに脆いのですか……。

阿倍野 我々は裏切られたところではないですか。ソ連が崩壊し、二十一世紀になつたら素晴らしい新世紀だと思つていたら、とんでもない。欧米は疲弊し、全体主義的な中国は膨張し、イスラム国が暴れ回り、原発は暴走し、なにより貧富の差は拡大している。先進国では医療や福祉制度がよくなりつつあると思つていますが実際は悪化している。すべてが非常に脆弱で、不安・不安定が増しているのではないですか。

石川 確かに便利にはなっていますが、人生の苦は形を変えても続いていますし、世界の不安定さ、将来の不確実性は増していますわね。

阿倍野 人間とは何なのかという視点が確立しないまま科学が発展しても、人間の持つ愚かさは改善していきませんか、不安定さは増すばかりです。いわば人類は減びの時に向かつて突き進んでいる。

石川 それが、新しい思想、地球人類が幼年期から青年期に成長するために必要な考え方であり、「死」へのアプローチですか。

阿倍野 そうです。そうです。所詮「死ぬんだ」「死ねば終わりだ」という考え方からは、結局功利的な人生しか浮かんでこない。神を持ちだしてもいいのですが、現代は長い間の神の思想を実質的に信じられなく

してしまっている社会です。本気になつて信じている人もいるが、多くの人びとが唯物的に生きている。それは「死後が無い」からと考えているからです。実は「判らない」のですが。

石川 私など、死後などないのだと理性では納得しようとしています。しかし「死後はあつてほしい」という願望と、なんとなく「いのちというのはずっと続くのじゃないか」という思いも捨てきれない。

阿倍野 それが大切なんです。実はデカルトに始まる近代科学はアインシュタインに到つて時空の場による相対的存在が事物だといっているのです。

石川 わかりません。

阿倍野 すみません。要するに総ては相互の関係性の中で成立するということです。

石川 それつていうのは、お釈迦様の「縁起」ですか。

阿倍野 ええ、そのとおりです。いのちもまた相互の関係性、縁起の中で成立する。前に一度言いましたか。我々の身体は60兆の細胞でできている。その身体の中まで1千兆とも言われる細菌などが活躍している。私たちは「自分」といい「我」という固有の実体を考えていますが、それは自らコントロールできない60兆、千兆の命のハーモニーの中で相対的な存在をしているに過ぎないのです。先ほどアインシュタインの難しいことをいいましたが、「速度が違えば時間の経過も違う」というのは有名な事実です。加速度中でも同じ事。一般相対性理論です。つまり絶対的と思つていた時間や空間というものが実は相対的なのだということです。現代物理学でもそしてお釈迦様の教えでも絶対的なものはない。「我」も不変の実体はないのです。石川さんの十五歳の時と現在では細胞の一つひとつまで違つている。記憶という脳の働きで、継続しているように思つているだけです。

石川 そうですね、実際、私の十五歳はもつと可愛かった。(笑)

阿倍野 身体はもちろんのこと、知識も経験も考え方、人間関係も社会関係も総て異なっているはずで、総ては時々刻々と変化していく。

石川 無常ですね。

阿倍野 そのとおり。無常・非我・縁生です。

石川 非我ですね。

阿倍野 ええ。少し述べたことがあります、阿倍野友之という、1メートル70センチ、体重67キロ、評論家・作家は瞬間に変化する、刻々と変わりゆく物質の集合体です。変わらない部分はない。ただし、無原則に変わっているのではない。阿倍野友之という生命が繰り返し返してきた「業」の力が縁によつて顕現しているわけです。実は大乘仏教の唯識派でしたか、無着や世親という、その唯識派の考えではこれを「刹那滅の相續」といいます。因みに大乘仏教の本質的議論の中では龍樹の「空」とこの唯識派の考えが大きな二つの柱になっています。

石川 刹那滅の相續ですか。刹那というのは瞬間と言うよりほぼ同時ということですか。

阿倍野 私の考えでは60兆の細胞、1千兆とも言われる細菌だけでも凄いですが、まてよもつとだ、となります。

石川 もつとですか。

阿倍野 ええ、一個の細胞は幾つの分子で…。

石川 あ、そうか、水に糖質・脂質・タンパク質(アミノ酸)・核酸ですか。

阿倍野 基本的なものをよくご存じですね。

石川 手元のスマホでといたたいところですが、まとめるときに調べました。携帯はガラケーです。(笑)

阿倍野 私もガラケーです。(笑) それはともかく、細胞の中にはDNA、つまりデオキシリボ核酸があり、31億ほどの塩基でできています。

石川 ちよつと待つて下さいよ。その塩基や核酸といつても、突き詰めていくし原子と電子でできている。

阿倍野 ご名答。(笑) 簡単に言いますと1千兆の細胞と細菌×分子×塩基……、まあスーパーコンピュータの「京」という数字どころではないですね。さらにそれが陽子や中性子や電子とまで分けていくと……。

石川 目が回る。(笑)

阿倍野 そうですね。仏教はインドで生まれて、彼の地はこういう数滴概念が途方もなく大きく、「恒河沙」といつてガンジス川の砂粒の数とか、時間では一劫なんていう単位もあります。説がたくさんあつて現在時間に換算しにくいのですが、一劫は二兆年、一つの大宇宙ができて滅ぶ時間だともいいます。まあ時間は置いておくとして、数としても超絶するような概念になります。

石川 しかし、細胞は命でしょうが、分子や原子になると……。

阿倍野 そのとおりです。しかし大乘仏教の行き着く先が「山川草木悉皆成仏」という思想です。ここには無機質も含めて、全宇宙が、生きとし生ける命の当体になります。

石川 全宇宙そのものが生命という思想はわかるのですが、石や山川まで命というのは少し、そうですね感覚的に受け入れにくいのですが。

阿倍野 私も考えました。でも原子や電子が、或いは時間や空間が、或いは「場」そのものが、我々の身体

を構成しているのです。どこからが植物や動物によくみられる成分である有機物で、どこからが無機物でもいえない。細胞と分子との区切りを引くことなどはできません。だから、「山川草木悉皆成仏」でいいと考えています。ただ、「眼・耳・鼻・舌・身・意」という六根で認識する、感じる。その一つでもいいですから感じる、捉えられるのが狭義の生命と違っていいのではないかと思います。

石川 認識というのは六根、眼と耳と鼻と舌、喉ですね。それから身体全体の感覚、そして「意」というのは心ですか。

阿倍野 そうです。お釈迦様はこの感覚器官だけで捉えられるものを経験的にこたえられた。だから、宇宙の始まりは、とか、死後の世界は、といわれても答えておられない。といって考えておられないわけではない。それが無常・非我・縁起です。非常に合理的です。人間の認識というのは極めて限られたものです。光りや色は可視光線だけしか認識できない。音も低周波とか高周波は聞こえない。匂いは犬にはるかに劣る。おまけに認識は人により立場により総て異なる。親子で同じ空を見て「青いねえ」といつても実際は捉えている色は微妙に違うでしょう。言語や文字というのは概念を制限しますね。「青」といつても青、蒼、碧とあり、紫色に近い色から緑色に近いまで幅広く青色といえますね。それで十分かという、海や山や大地の色を反映してもつと微妙に違うでしょうし、観察者の精神状態でも違いがあるでしょう。その限られた認識能力で経験的に獲得された知識や知恵を使つて、物事の背後に潜む真理を捉えられた。

石川 その真理からいうと「死」はどう捉えられますか。

阿倍野 総ては滅びるが、関係性のある縁によつて生じるのですから、輪廻でしょう。お釈迦様は輪廻の輪から抜け出す悟りを三十五歳の時に得られましたが、そのまま苦である人生を八十歳まで生きられた。

悟られたときに抜け出すことができたのに、それをしなかった。

石川 何故ですか。

阿倍野 悟りを得てそのまま去ろう、こは重大ですが、それは「生を捨てること」を意味します。お釈迦様、ブツダの別名は善逝ともいいます。善く去るです。ですから悟りは即ち涅槃、つまり死ですね。なのにそうされなかった。それを説明するのに「梵天勸請」なんていう逸話もあります。人びとのために悟られたことを説いて下さいと梵天がお願いしたという話です。でも実際は、老病死を取って引き受けて生き抜かれた。それは善く生きることが、命というものを浄化しより良き輪廻をする力、「業」に繋がるからだと思います。そのことを生きることでも人びとに教えられた。実は輪廻を正しく繰り返していき一番の力は、真理を人に伝えることです。

石川 総ては輪廻するのですか。解脱するというのは輪廻から脱出することではないのですか。

阿倍野 この世の総ては縁起によつて生じ、必ず滅びる、そこから如何なるものも逃れられないのです。そのことを知る命に生まれ、それを他の命に伝え、正しく生きること、より良き生を得ることができるのがお釈迦様の教えだと私は考えています。

石川 より良きというのは…。

阿倍野 相対的なものです。私たちは、すぐにお金や、社会的地位、美醜といったものに結びつきます。もちろんそういうものはないよりあつていいのですが、それだけしか見えないから輪廻思想が差別に結びついてしまう。金持ちに生まれたのは前世の行いがよくて、貧乏なのは前世の行いがよくないからだ、と短絡的に捉えると差別になります。金持ちイコール幸せと単純には誰も思っておりませんが、そうはいつでも他から見える

物質的なもの外見だけで判断してしまいます。単純バカですわねえ。

石川 単純バカですか。(笑)

阿倍野 金持ちでイケメンに生まれても、その後の人生を良くするのも悪くするのも自分です。また、我々の目から見て、例えば発展途上国の人は気の毒だ、と考えます。或いは江戸時代には白内障は失明、盲腸が腫れたらやがて腹膜炎で死亡だから不幸だと思ふ。冷蔵庫も洗濯機も掃除機も、電話もテレビもないから不幸だという。しかしその土地、その時代の価値観からすると不幸でしょうか。実は私の幼少年期は冷蔵庫も洗濯機も掃除機も、電話もテレビもなかったんですよ。

石川 ああそうですね。団塊の世代が十歳くらいまでは、冷蔵庫も洗濯機も掃除機も、電話もテレビもなかったですね。それでも不幸とは思わなかった。ただやはり、貧しいところに生まれるのは前世の行いのせいだと考える方が、それは差別思想ですが、楽ですね。

阿倍野 そのとおりです。幸福や不幸は相対的なものだど頭で理解しても、金持ちだからといって幸福にはつながらないと考えても、目の前の現象に目を奪われて単純化してしまう。結果、因果律は差別思想だとなってしまう。でも合理的に考えて、人間だけが原因と結果の連鎖から外れているはずはないのです。そしてそれを踏まえて、善なる行動を誰しもが取れる、仏法の真理にたどり着ける人間という立場に生まれたいことが最大の幸せなのです。だから、この真理を人に伝えることが一番大切なことになります。

石川 お釈迦様はそれをされた。

阿倍野 その通りです。だから涅槃というのは「死」ではない。真理を悟ってそれに向かって生き続ける姿が涅槃なのです。それを実践することで、肉体の死で虚空に帰った縁のある命は再び、真理を知ることのでき

る知能を持つ高等生物に産まれてくる。それは「阿倍野」という固有の人間ではありません。「阿倍野」という傾向性を持った命なのです。縁によって集まり形成される特色有る命なのです。総ては関係性の中で縁起しますから、同じようなつながりのある命とまたであうことになる。

石川 「死」というものが、おわりではない。再生再死を繰り返す輪廻そのものが真理だと言われるのですね。

阿倍野 そうです。正しく輪廻していくこと、正しく生きること、それが悟りであり解脱です。ただ、形而上の考えになつてしまいますので、後は信じてそのように「善く生きる」かどうかという行動にかかつてきます。そうすれば「死」は縁起によつてよりよき再生に繋がります。あくまで固有の「我」ではない、「非我」ですね。縁によつて物質が集まつて構成される生命の響きあいは続いていく。

石川 その考えを受け入れますと、ホツとします。

阿倍野 それでいいのです。心が安まり、正しく生きようと努力すること、それが生きるということです。その活動が続いていく。そして生きるということは実は楽しいことであるにも繋がるのです。

石川 一切皆苦とありますが。

阿倍野 無常・非我・縁起とあります。総ては減んでいくので、金やものにしろ人にしろ、愛にしろ拘泥するとそれは苦しみです。四苦の生老病死と愛別離苦、怨憎会苦、求不得苦、五蘊盛苦を合わせて四苦八苦とあります。人間という生命として生まれて、これらは避けられないものです。ただ、私は、喜びや感動や楽しみ、愛おしみ、情愛、慈しみ、満足、感動、充実感、有用感、快さ、トキメキ、幸福感といったものも人間としての大切な要素だと思えます。これらは生き方によつて創るものです。

石川 生は苦だけではないということですか。

阿倍野 そのとおりです。「慈悲喜捨」というのは四無量心という人の持つ大切な心ですが、「こだわりを捨てる」つまり「こだわりすぎるな」が基本です。そうして有意義な楽しい人生を創つていく。それが『涅槃』です。その様な命の営みは、「死」で中断せず、再び縁によつて誕生します。それが輪廻です。阿倍野が死んで阿倍野としてまた生まれるという意味ではありません。そういう関係性を持つ命が続いていくということです。だから善く生きれば輪廻は悪いことではないのです。大乘仏教では悟りを開けば無住処涅槃といつて思うがままに生と死を行き来できるといふ考えがありますが、そうではないと思います。そのような超越的力を持つのではなく、もともと命は流転していきます。それをより良き方向に創りかえていくのが今の生き方なのです。

石川 なんだか、嬉しくなりました。懸命に善く生きれば、より良き生き方のできる生死を連続した存在として、命は続くのですね。

阿倍野 私のいまだしている結論です。その考えが広まれば、人類はよりよい世界にもう一段ステップアップできると思います。「死」は断滅でなく、新たな生への準備なのです。新たな生をより良く生きること、新たな生はよりすばらしくなる。

石川 でも、より良く生きるというのは難しそうですね。

阿倍野 いいえ。その実践についてはまた改めたいと思いますが、ただ笑顔があればいいのです。

石川 笑顔ですか。

阿倍野 ええまず、妻や子や、親や、人びとに向かつて笑顔を向けること、それが第一歩なのです。突き詰

めればそれに尽きるといつてもいいかもしれません。

石川 何とかできそうです。

阿倍野 そのことについてはまた機会を設けて…。

石川 あ、そうですね。長くなりました。ではまた一杯の機会に…。(笑)



いち対いち対いち

高阪博一

五月十七日、大阪で住民投票があつた。大阪都構想の是非を問うもので、『反対』が『賛成』を上回り廃案となつた。結果が次の日の朝刊一面に掲載されていた。

その記事を読んでいる時、妻が傍らに来て、珈琲を置いた。いつもなら、そのまま離れて、掃除や洗濯などの朝の仕事をし出すのに、今日は横合いから覗いている。二人とも、大阪生まれの大阪育ちだ。H町の住民になつて二十年以上が経ち、既に高齢者になつてしまつたとはいへ、関心がない筈はない。

「やつぱり、気になるんや」妻の顔を見上げながら言葉をかけた。「まあね……」

曖昧に微笑みながら、妻はまた新聞に目をやった。何か言いたそうな雰囲気、妙に漂っている。「これこれ、この数字。投票率は六十七%弱で、有権者は二百十万人か」と、指でその個所を妻は示した。私は見易いように新聞をテーブルに広げてやつた。

「賛成が五十%弱の六十九万五千人で、反対が五十一%弱の七十万六千人、一人ほどの差、なんやね」念を押すように、妻は呟いた。私は訝しく思った、いつもはこんな数字を並べるひとではないので。なんで今日に限つて、と思わず口から出そうなのを、ぐ

つと飲み込んで次の言葉を待った。

「教えて。仮に有権者が十人いるとする。賛成の人が何人で、反対の人が何人で、棄権した人が何人なんやろう？」妻はゆつくり言い終わり、じつと私を見つめている。こんな感じで向き合うことが、久しくなかったのに、多少どきつとする。「なんやて！ そんなの直ぐに分かるかいな。先ずは…、電卓、探そう」私はちよつと慌てて、回転式の椅子を回そうとした。すると、妻がそつと私の肩を押さえた。

「電卓なんかいらんわ。ざつくりでいいのよ。ざつくりで」にやにやししながら私を見ている。この歳になつて、なんで算数の問題をする羽目になるの、と情けない思いが頭を過ぎつ

た。そう思う反面、錆びてはいても、錆きつてはいないことを示さなければならぬ。これが亭主の沽券コケンというものだ。ひよつとして、ここでさつと解答出来れば、夕食に一品くらい増えるかもしれない、と淡い期待も湧いてきた。やることに決めて考え出した。ええつと…。

この頃歳のせいか、細かい数字が面倒になつている。かといつて、大きな数字は昔から縁がない。もともと、文系を隠れ蓑に、数字の扱いを避けていた報いかもしれない。九九は出てこないし、二桁程度の暗算も殆ど出来なくなつた。そんなひとがこんな応用問題をしようというのだ。出来る道理がない。

もう一度、新聞をまじまじと見た。椅子

の背もたれに身体を預けて、珈琲を一口飲んだ。「二階の掃除、してくる。終わるまでに、できるよね」妻は念を押すように言い残して、リビングを出て行った。部屋が急に静かになった気がした。もう一口含んだ。仄かな酸味の混じった苦さが口の中を満たしている。暖かな液体が喉を通る。頭が覚醒していくのを徐々に実感する。ふーと息を私は一つ吐いた。肩の力を抜き、紙面を睨み、集中し出した。

応用問題はいつ頃から始めたのだろうか。小学校の低学年の頃からだろう。鶴亀算に旅人算、それに年齢算というのもあった。「でけへんかったなあ。いろいろ教えてもらったのに」自然にそんな独り言が口から零れた。

勉強が出来ない訳ではなかった。かといって出来るというほどでもなかった。応用問題がすらすら出来る友人を羨ましく思いながら、特に努力することもなかった。

「できる？ 先生が助けてあげようか、タカハシくん」優しい声が後ろの方から聞こえた。ような気がした。薄い靄モヤはかかっているが、何となく聞き覚えのある声であった。はつとして振り返ると、リビングのドアが少し開いているようだった。

「ええつと、小学校の一・二年は男の先生で、三年が女の先生やったなあ。確か、名前は、あのー、むー」私は人差指を額にこつこつ当てながら、先生の名前を思い出そうとした。歳がいくと、昨日のことは忘れても、子供の

頃のことは覚えていたものだ、よく耳にする。「ええつと。名前は確か」と、もう一度繰り返したが無駄だった。

「あかん、あかん。問題や、問題」と、ぶつぶつ言葉を重ねた。余分なことを考えている場合ではない。妻に言われている応用問題を解かなくてはならない。有名私立中学の入試問題なら、歯が立たない。妻が出す程度の問題なら、手も足も出ない筈はない。上の方で、回転を包み込むようなモーターの音がし出した。「ひたすら、集中、集中や」私は念押しするように、そう呟いていた。

「兎に角、百分率やから、割合の問題でしょ。賛成と反対はほぼハーフ・ハーフやから、二人いたら、一人が賛成で、もう一人が反

「対やないか」と、思い付いた。ちよつと嬉しくなつてきた。た易いことでも、出来るとうきうきするものだ。シャボン玉に映る虹のような淡い期待が湧いてきた。「それから次のステツプは？ そんな大層なもんかいなあ」私は妻のいない椅子に向つて、苦笑いをしながらぶつぶつ喋りかけていた。

「投票率が六十七%やから、あいつが言った、ざつくり七十%としよう。すると、七人は投票に行つたことになる」私は新聞を手を取つて、ぐつと引き寄せた。すると、即座に背後で声が出たような気がした。「タカハシくん。そしたら、行かなかつたひとは、何人でしょうか？」と。私は新聞をゆつくりテーブルに置いた。「三人です」と、私は振り返つて

立ち上がり、ちよつと舌足らずな調子で答えていた。何故、そんなことをしているのかわかりませんでした。時に、人間は不可解なことをするものだ。何気なくドアを見ると、更に開いているような気がした。

「オオタ先生や！」と、不意に言葉が飛び出した。名前が出てくると不思議なもので、顔もはつきりとするものだ。化粧つ気はないものの、薄つすらと紅い^{アカ}口紅を取らずかしそうに差した笑顔が浮かんできた。六十年近く経っているというのに、あの時分のままだ。記憶というのは凝結したまま、その扉が叩かれるのを待っているものなのだろう。

「まだ若かつたなあ。ええつと、あの先生、幾つやつたかなあ。初めてクラスを持ったと言

つてはつたから、二十四・五やろう」ゆつくりと私は目を閉じた。古い校舎が浮んできた。皆が元気よく校門を出て行く。その中に白いパラソルを差した先生が立っている。さらに煌めくような光に包まれ、一人一人に挨拶を送っている姿が甦った。「オオタ」と、私が言いかけた時、「出来た」と、二階の方から声が出た。いつの間にか、あの機械音は止まっていた。

「いかん、いかん。先生のこと、考えている場合やあらへん。算数、算数」目を開けて、私はテーブルに置いた新聞をもう一度取り上げた。「ええつと、賛成と反対は、ハーフ・ハーフやから……、けつたいな英語やなあ。ほんまは、どう言うんやろう」と、再び横道に逸れ

そうになった。二階からまた「どうなん」と、先程よりちよつとトーンの上がつた催促の聲がした。今はこれを片付けることが肝心だ。「英語の時間やない、算数の時間や。五分五分で充分や」私は氣を取り直した。テーブルのカップを手に取り、珈琲を口に含んだ。こげ茶色の液体はぬるくなつていた。「さつき、思い付いたように、賛成と反対はざつくり同数やから、いち対いち。まあ、十人、寄つたら、五人と五人や。六人やつたら、三人と三人。そしたら、七人は？」私は考へ込んでしまった。数字ではあるとしても、三人半という人間の数は実際にはあり得ない。たとえ半人前という言葉はあつたとしても。「半人という人間はいてないから、切り

捨てやね。ざつくりでいいわ。三人と三人でええやん、ね」私は誰かに同意を求めめるように言葉を発していた。更にまた、あの聲が聞きたくなくなったのだ。包み込むような低く柔らかな聲が。「できたね、タカハシくん」と、どこからか、あの聲が聞こえたような氣がした。「これでいいですよね」私は念を押すようにその声に応え、ゆつくり首を回して、顔を上の方に向けた。「そろそろ、降りてくるかなあ。早く、いらつしやい」私は妻の足音に耳を澄ました。

ドアが勢いよく開いた。「答えは？」と妻が笑いながら私の傍らに来て、肩をぼんと叩いた。いつもの席に着くよう私が促すと、妻は向かい側の自分の席に腰を下ろし

た。「掃除の間やから、十分くらいか。まあまあやね。それで、結論は？　こんな言い方、大袈裟やね」一気に言い終えると、にこにこしながら私を見ている。

「手短に言うよ。十人やったら端数が出るので、大阪人が九人寄るとする。先ず、棄権が三人。残りの六人が投票して、賛成が三人、反対が三人やね。簡単に言つて」私は妻に結論をそう伝えた。どことなく、大袈裟な言い方と思いつつ。「なんや、そんなんや。もしたら、いち対いち対いち、やんか」妻は意外にあつさりと応えた。「そやね」私は拍子の抜けたような声を出した。妻はまた笑顔で問いかけてきた。「旧大阪人としては、どつちですか」と。

「そら、反対やね。二重になつてゐる個所を改めるのは、せなあかんことやけど、どう考へても、住んでいた地名が変わるのは、どうもなあ。場所が無くなつてしまふ気がするんや」私は率直に思うことを口に出した。判断に感情を交えるのは慎むべきだ。間違いの元になることもよく分かつてゐる。それでも、地名が無くなることは寂しく、辛い。歳がいけばいくほど、この思いは強くなるに違いない。「そつちは、どうなん」と、真面目な顔で妻の顔を見た。

「どうかな」妻はちよつと間をおいた。私は次の言葉を待った。「賛成やわ」きつぱりとした声が聞こえた。「地名が変わつても、なくなる訳やないでしょ。温暖化で海に沈ん

でしまつたら大変やけど。それより、お赤字を解消する方が大事と思うわ。私らは残り少ないけど、若い人はこの先、長いもんね」妻は悪戯っぽく言うと、テーブルの上を片付け始めた。カップや皿を手早くシンクに運び、洗い出した。私は新聞を片付け、いつものようにテーブルの上を拭いた。布巾を畳みながら、何となく妻の背中を眺めた。

「その通りなんやけど、それにしても、リヤルやなあ。オオタ先生はどうやろう？」誰に言うともなく、低い声で呟くと、耳の中で、あの声がまた聞こえた。「私はねえ。棄権やわ。もう、この世に……ふふふ」と。「出てくるには、季節外れだったなあ。それに、まだ

朝や。時間も早いしなあ」私は胸の中でそんな言葉をぼつりともらして、二階へ行こうと立ち上がり、ドアのノブを握った。「結局、いち対いち対いち、なんや」子供に帰つたような高い声を、私は小さく出していた。

了



北海道の高校生との

不思議な縁

魅華

主人が、出し昆布の試供

品をもらつて帰つてきた。北

海道の高校生が京都に就

学旅行に来ていて、京都駅

近くで郷土の特産品をP

Rしていたのだと言う。夕

飯の食材に使つてみると、ま

ろやかでとても美味しかつ

た。

「朝早く起きて、親やじいち

やんが船に乗つて取つた昆

布です」の微笑ましいメッセ

ージが添えられており、そ

れにもひかれ早速感想を

書いて高校に送つたところ、

その生徒の親御さんから箱

いづばいの出し昆布が送ら

れてきた。お母さんの手紙

も添えられていた。

嬉しくて何度も読み返

した。試供品の感想など書

いて送る人など世の中にい

ないだろうから、さぞ驚か

れたことだろうが、とても

喜んで下さっている内容だ

つた。北海道とこちらとの

長い距離がとても短く感じ

られた。このご縁を大切に

していきたいと思つた。

人とのつながりが昔に比

べ希薄になつてきたと言わ

れるが、そうでもないと思

う。人と人とは心が通じれ

ばその輪が広がる。年を重

ねていくにつれてその大切

さがわかるようになった。こ

れからも人とのご縁を大切

に、出会いに感謝して生き

ていこうと思う。

のですね。

◆ 毎日新聞

みんなの広場掲載

追記：

この方とはこの後年賀状のやりとりをしたり、食べて頂きたくとのメッセーじが添えられた海の幸が送られてきたり、こちらからも送ったりといい関係が続いています。縁は不思議なも



ハハハの歯――八十歳で二十本の歯――

石川希理

お食事時でしたらお許し下さいな。

歯医者さんにはばらくかかりつばなしになった。
つた。

私は医師と名のつくところはあまり行くところを変更しない。やはり馴染みになった方が
良いだろうし、ホームドクターというかかりつけ
医も必要である。

歯科医は、仕事を始めた二十代から三十
代の若い頃は、仕事場の近くにあった。まあ虫
歯の治療が主だ。度々訪れるわけでもない。

なにも支障がなかったのだが退職すると距離
的にゆくの不便になった。それで自宅近くに
新しい歯科医ができたので訪れた。医師に成
り立ての感じで丁寧の説明してくれる。歯垢
の除去をしていただいて驚いた。痛みがない、
血が出ない。

二十年ほど診ていただいた歯科医では、
血だらけになっていたのだ。

「乱暴だったんだな」と改めて思った。若い頃の
歯科医は大きな歯科医である。しかし予約
をしていくと、待合はいつも私だけか一人程
度。全体が薄暗く、薄汚れた待合や診察室。
「流行つてなかったんだな」と改めて思う私の

お粗末さである。

この近くの新しい医院は小さなビルの上にあつて、待合は六畳ほどもない。予約していくとたいてい私を入れて二人くらい。治療が終わると出口で医師がマスク姿で頭を下げられる。なにより丁寧なので、気に入って通い出した。六十代になると歯も薄くやわになる。

虫歯に詰めている銀のアマルガムというのが、そこら中に入っている。金銀パラジウム合金というのも有るのでそれかも知れない。ネットで見ると銀のアマルガムは「銀」自体の有害性も議論されているという。セラミックなどの白いレジン充填というのもあるらしいが、

なにせ保険が適用されないと年金生活にはしんどい。ガバリとかぶせているのも銀色だが、セラミックなどの保険のきかないものもあるという。これはもうお医者さん任せである。両奥歯の上下は銀色になつた。ところがである。このかぶせがよく取れる。食事中に「あれれ」と堅い物が触れると、詰め物やかぶせである。丁寧で優しいが、どうも……なあ、と考えるようになった。ネットで見るとレジン充填は保険適応の治療法だが、歯科医師の知識・テクニックの差が非常にしやすいとある。

この辺りの記述は、歯の治療の内容がよく理解出来ていないので、適当に読み飛ばしてい

ただきたい。

この医院に通い出してもう数年になる。しんとした室内、優しい歯医者さんだ。ところが、次第に待合の壁紙が薄汚れ、それがそのままになりだした。

「流行っていないのだ」と思う。

これからますます高齢になる私にとっては、何処かいいところがないかなあと思わせる。

自宅から南に歯科医院ができた。時折その場所を通ると比較的大きな待合にはいつも人がいて、しかも部屋が明るい。これは大切なポイントである。明るく清潔な病院はそれだけで心をリフレッシュさせてくれる。

ネットで検索してみたらHPが出てきた。

安原歯科医院という。院長安原豊人先生、副院長安原美香先生とご夫婦らしい。私の息子夫婦に聞くと通っているらしくて評判もいい。ランキングなども上位らしい。HPには英語版まである。

でまあ、電話をして出かけた。

右上の奥に近い歯がぐらぐらして、噛むと痛い。

この医院には診療台が四つ有る。

院長ご夫婦ではない若い方が診察して下



さつた。

この右上の歯、普通、上顎奥の歯の根は三本という。このうち一本が前の何処かの歯科医院で、治療のため人工のねじ釘みたいな物に代えられている。これが錆びている？ 取り

去った実物を見せていただいたが、細い爪楊枝の先二センチ弱というところだろうか。この内部が炎症を起こしているという。三本の根が必要なのに二本となるとぐらつくが、もし治療してダメだと、状況では抜いて差し歯とかインプラントとかにしないといけないらしい。

「イ、インプラント」という言葉が頭の中を駆け巡る。

とにかくインプラントというのは、あごの骨に土台をねじ込む方法で、保険がきかないときいている。きかないだけでなく高額である。おまけにニユースなどではインプラント失敗というのが頻繁にでてくる。

ま、インプラントは勘弁願いたい。しかし、上手く安定しないと、どちらにしても自分の歯を失うことになる。

この前見たNHKの「ためしてガッテン」だとあごの骨というのは空洞の多いスカスカの骨で、歯が一本欠けると連鎖的に他の歯も傾くらしい。

「消毒して、臨時のかぶせをしていきます」

ということで通うことになった。上手く消毒できて、歯の根が健康になつて埋め込みが上手くいつて、固定してくれればいいが、まあ歳のせいもある。

こうして通い出したら、なんと左下の一本がどうも浮いている感じで何か噛むと痛い。

「おいおい、右上だけと思つていたら左下もかい」

こうして二本目の治療が始まることになった。

さてここからは、お食事の方は時間をずらせてどうぞ。

右上の歯は治療が始まっているが、左下の

歯は左の図のようになっていられるらしい。内側の部分が欠けていて、ここに詰め物がありかぶせをしていたのだ。



それがどうやらやはり土台の部分で炎症らしい。

この歯は残っているのが図の白いところだけである。この残っているのにヒビがあると、歯を保存できないらしい。まあ、詰め物をしてもしも白い部分と一体化しないと強くないのは判る。

とりあえず、内側の詰め物を除去して消毒し、経過を見ることになった。



め物、多分セメント?をした歯が治療中で、その左の歯もプラスチックみたいな白い物で半分覆われている。奥になると銀色の詰め物にかぶせ。まあ、六十七年間よく働いてくれたが、これから男性の平均寿命の八十歳まで十二年、それ以上、或いは百歳まで…。

すみません。六十七歳の私のお口、左下である。前歯の部分は上下ともいいのですが、奥はかような状況だ。臨時の詰

(いま死ぬかも知れんのに…陰の声)

それはともかく、持つてもらわないと困る。歯の不健康は全身の病気や認知症にまで繋がる。そりゃあそうだろう。人間の身体は六十兆の細胞からなっている。六十兆ですぞ。この人間の身体の中には六百兆から一千兆の細菌類が住みついている。

(うそ！)

といわないで欲しい。小さなヨーグルトの宣伝で、二億個の善玉菌なんていう宣伝がありますな。

まあ想像を絶するほどの生命が協同して、一個の人間の命を保持しているのである。全

身が連携し関係し影響し合っているのは自明の理で、歯が悪いと全身に悪影響を及ぼすらしい。



さて、この歯、やはり消毒をして、次の上のような銀色の土台が入った。歯が割れていなかったためこのような処置になったようだ。

この間右上の歯の処理も進んでいる。

歯科治療というのは一週間間隔である。かぶせ

などの製作と、処置や詰め物をした後、歯茎

が落

ち着くのに時間がかかるのかも知れない。

型を取り最終的にこの左下は下の写真のような事になった。



さて、私の三つ歳下の弟は自分の歯が三本しかない。あとは入れ歯である。

「八十歳になっても、自分の歯を二十本残そう」というのは、「8020」運動という。

日本の男性の平均寿命が約八十歳だから

ら、死ぬまで二十本は欲しいということらしい。ネットで調べていたら日本歯科医師会が提唱し設立された「8020推進財団」というものもある。

これは親知らずを除く28本の歯のうち、少なくとも20本以上自分の歯があれば、ほとんどの食物を噛みくだくことができ、おいしく食べられて健康に繋がるからである。

この「8020」運動だが、平成二十三年（2011年）では38.3%である。約4割の人が該当していることになる。

因みに平成23年歯科疾患実態調査によると、六十五歳から七十歳の間では70%が

該当する。八十五歳以上でも十数%が二十本以上自分の歯である。

食事の後ほうがいして、歯磨き、寝る前は丁寧にとこのをもう相当以前から実践しているが、やはり年に一度は点検が必要だろう。

この歯科医院では、治療が完了してから半年？ くらいすると、ハガキでお知らせが来る。有り難い制度である。痛んだりしない限り、なかなか歯科医にかかる気にならないから、定期検診は有り難い。とはいいつつ、私の場合、慢性的な糖尿での病院がよいと、朝、マツチの頭ほどの薬の服用。目は両目とも白内障手術済みだが、右目は黄斑上膜で手術を受け

たので、その定期検査。ま、半年に一度になったが。それに軽い前立腺肥大で、とまあガタガタである。

それでも「幸い健康」でという言葉に当てはまるかどうか判らないが、二十坪の菜園と、趣味の文藝同人のお世話、週一コマの大学の授業には支障がない。

支障があるのは目減りする年金である。健康保険料も驚くほど高いが、それでなんとか老朽化した身体を維持しつつ、社会参加もできている。

「しかしなあ……」

いろいろと頭を悩ませつつ、今日も前向きに

生きたいと思う。

右上と左下の歯を治療したことを書いてきた。

かぶせが終わって、後は最終確認だけにもう一度出かける。一応終わったと思っていた。

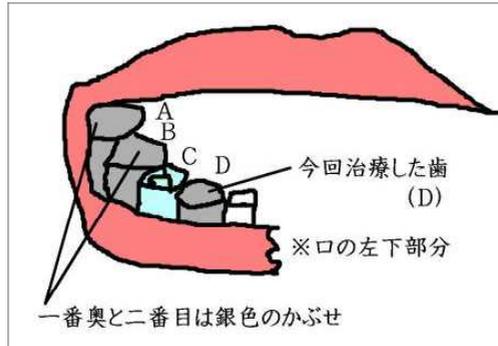
それまでの或る日、左下の部分で食べ物を噛んでいたら、二度ほど「ズキン」とする。

あらら……やばい。

固い小さな物が歯に食い込んでずきんとする、と考えた。虫歯になると、食べ物を噛んだ拍子にずきんとするような感じである。

初めは錯覚かなあとも思ったが、どうもそうではないらしい。

鏡を見てみると、図のように今回治療した



物がある。

ははあ、これが凹んだか、一部が取れたかし

歯(D)の横に奥

に向かつてC B

Aの三本がある。

AとBは銀色の

かぶせが光ってい

る。

Cは白い歯そ

のままであるが、

歯の上表面にて

こぼこした詰め

て、そこに食べ物がポイントであたると痛いのだ、と思った。

もちろん素人の判断である。

最終確認の日は、前回同様、院長の安原豊

人先生である。

「どうですか」

と聞かれたので、「左下はしつかりしていま
す。右上は頼りなかつたのですがしつかりして
きました」とこたえた。右上は何せ歯の根が
二本しかない。この歯は本来三本必要なのだ
そうだ。まだ少し頼りなく、痛みではないが浮
いている感じもあるが、まず問題なさそうであ
る。

「他にはどうですか」

と続けて聞かれたので、「治療していただいた歯の奥の部分で食べ物があたると時折、ずきんとするのですが」とこたえようと、レントゲンを見てたちまち「あ、これですな」と、最奥のAをコツンとされた。この奥歯は昔かぶせをして何事もなかったのである。

「少し膿があるようです。外して治療、今日から続けておこないますか」

と言われたので「はい」とこたえた。

たちまちかぶせが外されて、細い金属の先のようなドリルが当たって、それからゴムのローラーのような物が当たると、ずきんとまで

は行かないが、あのずきんの感じが甦ってきた。

それからあつという間にごちよごちよと治療され、仮のセメントが詰められて終わりとなつた。

何のことはない。素人の私はかぶせをした歯の中が痛むなどとは思っていないのである。歳が行けば歯茎も痩せるし、かぶせも経年劣化する。

というわけで、次回くらいに型を取って、その次くらいに新しいかぶせが入って、今回の歯の治療は一応終わることになるのだろう。

ま、右上は元々、歯の根が足りないので長

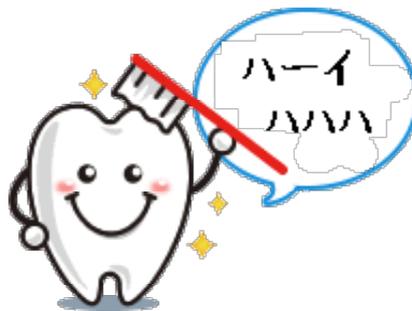
くは持たないといわれている。また他のかぶせもガタが来るだろうし、どんどんあごも老化していく。

この歯科医院は、定期検診のハガキを下さるので、それに従って、なんとか手入れをしつつ、8020目指していきたいと考えている。

「まあ、生きて入れ歯ですが」

（「入れ歯」の字は故意ですぞ）

おしまい



※歯科医プロナビの画像を加工

風詠社文庫 [自選童話集]

一本50,000円

天然知能水

石川希理著

平成26年7月7日 風詠社発行 648円 + 税

ISBN 978-4-434-19464-1 C0093

お近くの書店からご注文下さい。

※ネットの「アマゾン」・「紀伊國屋」・「7ネット」などでも入手可。

収録作選評(抄)「そばづえ」メルヘンとしては珍しいS・Fタッチのもので、星新一の系統に属するものです。このまま、短篇漫画のストーリーになりそうですが、人間の未来を予見するようなどころもあり、まだぼくらはいろんな意味で「そばづえ」をくうことが多いので、身につまされる現実感がある。

漫画家 やなせ・たかし

コシーナ文庫 [短編小説集]

エスプラネード

石川希理著

平成25年12月1日 コシーナブックス 645円 + 税

ISBN 978-4-904620-15-1 C0193

ネットの「アマゾン」からご注文下さい。

[エスプラネード]

独特の設定、構成で描かれた巧みな作品だ。短編小説は主人公の視点で書くのが常道だが、軽い認知症を疑われる主人公「私」は、意図的ではあるが、容易に昔の憎き上司の視点になったりもできる。

自宅から約4キロにわたる、過去にまつわるエスプラネード(遊歩道)で回想にふけり、亡くなったはずの妻が時々現れて会話を交わすなど、多様な幻影を見ながら何かおかしいと思いつつ歩く。その道は(ま、しゃあないか)と生きた私の、人生のエスプラネードでもあるという。そして意外な結末で終わる一。諦めを感じる人生をセミドキュメンタリー風の手法で描いた秀逸な作品だ。

野元正・作家 [神戸新聞書評・2013年3月30日]

◆ 受贈誌の紹介

● ご恵贈ありがとうございました。

● アクトス会員の皆さまには、閲覧希望がありましたら編集室までご連絡下さい。

①『あべの文学』20号 あべの文学編集委員会

〒543-0027 大阪市天王寺区筆ヶ崎町2の50の1102 奥野様方

②『ペンペン草』14号 那珂ペンクラブ 2015年4月30日発行

〒679-11107 多可郡多可町中区奥中970-42

③『八月の群れ』VOL.60 記念号 2015年4月発行

〒673-0841 明石市太寺天王町4-2 野元様方

■ おしらせ

- ① 例会は原則2時から4時まで(延長しても5時まで)とします。
- ② 原稿締めきりは、2/5/8/11月末日です。締め切り月、ひと月の間に送信下さい。
- ③ HPの掲示板に例会報告を載せております。





◆ 中高年齢労働者福祉センター
(サンライフ明石)

〒673-0041 明石市西明石南町3丁目1-21
電話078-923-0770

- ◆ 合評会(例会)は、中高年齢労働者福祉センター(サンライフ明石)(上図・所在、連絡先)です。奇数月・第3土曜日、2時からの予定です。改めてご連絡しませんので、参加される場合は手帖などにお控え下さい。
- 出欠のご連絡は不要です。

編集室から

◆次号(第28号)の原稿締切は
8月末日必着です。

◆7月例会は18日(土)です。

◆9月例会は19(土)です。

◆第3土曜です。14時から2時
間程度です。

◆例会後、参加可能の方は懇
親会において下さい。

◆HPに、27号までを、PDFフ
ァイルで掲載しました。URL
は次のとおりです。

<http://actos2008.o.oo7.jp/>

(ネット検索の窓から「文芸□
アクトス」といれて探されても出

てきます。□はスペース)

◆通信にも書いたが、今回は少
し気を揉んだ。通常、締切日
二、三日前には、短詩型の詩と
か短歌とか俳句が届くのだが、
何も無い。

短詩型の方は、社会的な活
動でお忙しい、あるいは学生さ
んである。四月五月は年度初め
で、人事やら異動やらめまぐる
しい。

幸い四人の方からエッセイや
小説が届いた。一安心だが、いつ
も三十枚ほど書かれる方のもの
が今回は短い。それで急遽、HP
に書いた私のエッセイを持って来
た。これでもあと十頁ほど通常

のものに比べて少ない。

ぜひ、いまから作品を書かれ
ため込んでおいていただきた
い。

◆自治体の文芸募集・出版社
などの作品募集、新聞の投稿
欄、一度応募されて欲しい。

◆表紙「六角堂」は棟近喜忠
氏の絵です。先日、私宅の押し
入れの天袋を整理しました。私
が書いた1982年の姫路城の
油絵などと一緒にいただいた物
を入れていました。4号(ハガキ
四枚大)のカンバスです。実物は
ご本人にお返しし、写真を撮っ
て掲載の許可をいただきました。
ありがとうございます。

■ 入会下さい。ネット・デジタルで執筆です。

◆ 入会するには◆

① 会費1年分(12,000円)を下の振込先に振り込み

② 〒住所・氏名(フリガナ)・生年月日・職業・電話・
メールを明記の上、※振込用紙の通信欄記載でも可

〒673-0031 明石市宮の上1の17の614

大西方 アクトス編集室 へ、お送りください。

※**読書会員の場合 年会費は2,400円です。**

※会員・読書会員とも年4回、各1冊お届けします。(送料含む)

◆ 会費等振込先(郵便・当座)◆

口座:00900-5-39616 大西 生一朗

※会費以外に発表負担金などは不要です。

アクトス 第27号

第7巻第3号・通巻第32号

発行 平成二十七年八月一日

編集 大西亥一郎

発行所

〒673-0031

兵庫県明石市宮の上一の十七の六一四

大西方

大和評論社「アクトス編集室」

Tel&Fax 078-922-4562

actos2008@mbe.nifty.com

非売品(頒価)800円